

地域住民との水辺における交流GPの実践的研究

千葉工業大学 ○学生員 江連 直樹

千葉工業大学 正会員 篠田 裕

1. 目的

千葉県市川市の真間川水系境川で毎年8月に行われている「とうろう流し」。当研究室は、このイベントに参画しているが、その歴史的経緯や、運営組織について、地域住民の意識の変化を踏まえた、新たな方策・運営方法等を考える。

2. とうろう流しが始まった由来

今、真間川といわれる川を、誰もが新川（北方、鬼越側）とか境川（八幡側）と呼んでいた頃、京成線の踏切の近くで、お盆の時に御霊送りが行われていた。提灯に火をともし、お供えを持った親子がやってくる。桜の枝の下の手で、盆提灯の火を線香にうつして提灯の火を消し、お供えと線香を並べ、煙を通して川に向かって拝んで帰っていく。この川は正に村の境の川、異境に通ずる川であった。（図2、図3）

昭和57年、川の拡幅が決まって桜並木は伐られ、緑の土手はコンクリート護岸になることになった。それと同時に、盆明けのお棚流しも、この頃には川を汚すというので殆ど行われなくなっていたが、今後はそれもまったく無くなることになると思われた。そうした、ふるさとの川との心の繋がりを何とか残せたら、と思って始まったのが、とうろう流しである。



図1 周辺の流域図



図2 春の風景



図3 夏の風景

3. 手作りの行事

「境川の桜堤」として、京成電車のお花見案内の中吊り広告にも謳われた桜並木は、伐られてコンクリート護岸になってしまったが、地元の住民と行政の話し合い、協力によって、並木の半分の保存と伐採部分の復活、緑道としての整備を見、昭和63年には建設省の郷土賞を受賞するに至った。その申請書には、とうろう流しも実績として入っていた。

ゆたかな心をつくる、ふるさとへの思い、水と親しむということが基本にあるとうろう流しだったので、燈籠はすべて手作り、それも誰にでもできるもの、というのが趣旨で、初めはベニヤ板に割箸で骨組みを組み立てた

キーワード： 真間川、とうろう流し、歴史的経緯

連絡先：〒275-8588 習志野市津田沼2-17-1 千葉工業大学 工学部 建築都市環境学科 TEL 047-478-0446

が、もっと易しくと次第に改良して厚紙の骨組みに代わり、組立説明付きのセットにして頒布するようになった。従って参加者の手作りで、大きさや作りにはどれも差がなく、ただ絵や字にその人の思いや個性が発揮されているということになる。

そして日時や放流時間は自然の潮時に合わせ、放流や回収の作業もすべて実行委員の手で行うという、これも全くの手作りの形で今日に至っている。

4. 実行委員会組織

「真間川水系境川とうろう流し実行委員会」は、富貴島自治会、八幡5丁目大和自治会、八幡下町自治会、八幡下町ゆうづる子ども会、NPO法人市川おやこ劇場、千葉工業大学篠田研究室、真間川の桜並木を守る市民の会で組織されている。

これらの団体から数名の代表者が数回の会議を経て運営に当る。市川市や市川市社会福祉協議会、市川市観光協会の後援も得ているが、数年前から財政的な援助は打ち切られている。

協賛・協力団体は、地元の商店や企業など 14 団体・社を越える。とうろう流し参加者に対する記念品や、実行委員の夜食等の援助に役立っている。

5. スケジュール

お盆過ぎの土曜日、潮の状態を見て日程を決める。ポスターの提示、チラシの配布、地元FM局のお知らせ、市の広報紙などによる広報活動を行なう。1週間前にとうろうセット（¥300）の販売を行なう。

当日 17 時半頃より受付を開始、道路脇に展示する。同時刻頃より、X型人道橋（北方橋）の上で、歌唱大会、和太鼓の演奏、そして売店などが開店する。

18 時 30 分頃より、市関係者・町会長等のあいさつに引き続き、花火の合図によりとうろうの放流が始まる。

とうろうの放流は、垂直護岸から水面へのアクセスが難しいため、毎年そのために鉄パイプと足場板で仮栈橋が作られ、手漕ぎボートを繫留して、当研究のメンバーが放流している。

6. 本研究室の協力体制

千葉工業大学では、文部科学省の交流GPの予算を得て、地元との共同事業を立ち上げ、様々な企画が実施されているが、本イベントは、本学の地元とは言えない市川市内での事業となり、その対象から外れた。

しかし、土木工学科高橋研究室が 10 年以上も前から参加していたイベントで、それを引き継ぐ形で現在に至っているので、文字通りボランティアで参加しているものである。

放流したままではゴミになってしまう「とうろう」を、下流地点でボートに乗って回収するのが、主な業務であ

る。回収地点からさらに下流には、消防署によりオイルフェンスが展開され、回収もれを無くす態勢であるが、全数ボートにより回収されている。

7. まとめ

本学建築都市環境学科は、建築設計・地域デザイン・都市環境(土木)の3コースから成り、多種多様な目的を持った学生が存在する。

本イベントは、地域住民との交流を中心としたボランティア活動であるが、真間川という都市河川を通して多面的かつ実践的学習活動の一環となっている。



図4 準備の風景（その1）



図5 準備の風景（その2）

参考文献

鈴木恒男：境川と燈籠流しの歌，たくみぼり工房，1994